
パパ、いかないでーしゅ

大橋 秀人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パパ、いかないでーしゅ

【Nコード】

N17480

【作者名】

大橋 秀人

【あらすじ】

勢いで離婚してしまった男。今日は週に一度、子供と会える日。
(セツナイ系)

頭に血が上っていた。

結婚してからケンカばかりで、子供ができてもその数は減らなかった。

つまらないことで意地をはってばかりいた。

自分が正しいときはもちろん、正しくないときでさえ、素直に非を認められなくなっていた。

だからって、どうしてあんなに簡単に判を押してしまったのだろう。リエの挑発など、それまでにうんざりするほど受けてきたではないか。

理由などあつてないようなものだ。

日常の些細な出来事から生まれる小さな鬱憤の数々が、いつしか巨大な塊へと膨れ上がっていたように思う。

半分がすでに記入してある離婚届を突きつけられたとき、目の前が真っ赤になったのを覚えている。

そこに判を押せばこの憤りに満ちた生活から抜け出せる、全てを振り出しに戻すことができる。

そう思った。

「 パパ！」

無邪気に抱きついてくる洋人の頭を撫でながら、何度目かのフラッシュバックが起こる。

あの時この子がそばにいてくれたら、判を叩きつけて家を飛び出したりはしなかっただろう。

「ヒロ、元気だったか」

抱き上げ、頬ずりしながら訊く。

「げんきでーしゅ」

と洋人は嬉しさをどう表して良いかわからないくらい元気にそう言う。

「今日、どこに行きたい」

「どつぶつえん！」

「ヒロは動物、好きか」

「すきでーしゅ！」

覚えたての言葉が愛らしく、一週間、会わなかった分を取り返すように抱きしめる。

何も望まなかったからか離婚後の調停は驚くほどスムーズに済み、

週に一度の洋人との面会も許可された。

子供は少し会わないだけで驚くほど成長するものだ。

一週間前にできなかったことが、次の週には平気でできている。

言葉もそうだった。

少し前に単語を覚えたかと思うと、今日のように語尾に”でしゅ”をつけられるようになってくる。

微笑まずにはいられない、愛おしい声。

オレはそんな愛おしい息子の成長を、飛ばし飛ばしでしか感じられない。

「パパ？」

気づくと洋人は、心配そうにこちらを見上げている。

慌てて微笑みを返す。

せめて、自分といるときだけでも幸せを感じさせてやりたいと思う。

「よし、じゃあ今日は動物園にいくか」

明るく言って洋人を肩車する。

「いくー！　いくー！」

頭の上ではしゃぐ息子の重さを確かめる自分がいる。

大きくなつたな。

動物園でたくさん遊んだ。

と言つても洋人は口だけで、大きい動物には近づけず、無理に触らせると泣き出す始末だった。

でも、遠巻きにキリンやライオン、カバやゾウを見ているときの瞳は本当にキラキラしていて、それを見ているだけでオレは嬉しくなった。

小さなモルモットを力いっぱい掴んでしまったのを叱るとベソをかいたが、アイスを食べようと言つた途端に泣き止む。

子供は正直だ。

不器用にアイスを頬張る息子を見守りながらそう思う。

嬉しいときは嬉しそうに、興味があるものには駆け足で近づき、でも怖いから泣く。

叱られて憤って泣くのに、好物を前に泣き止む。

そして今、無心でアイスを頬張っている。

「そろそろ帰ろうか」

そんな素直な子供の体を、オレはあと何度、強張らせなければなら
ないのだろう。

「もう、ママとの約束のお時間なんだよ」

「いやでーしゅ」

そう言っつて洋人はアイスを投げ捨ててしまう。

俯いて、顔をクシャクシャにして泣き出してしまふ。

手を引くと、全身を使って抵抗してくる。

抱き上げると泣きじゃくる。

「パパ、いやでーしゅ。パパ、やーでーしゅ」

たまに洋人は、オレのことを嫌だと言っつ。

しかしそれは、好きが滲み出したわかりやすい言葉だ。

わかりやすく、愛らしい言葉だ。

言葉が純粹な分、胸が引き裂かれそうになる。

このままずっと一緒にいられたら。

それでもオレは想いと裏腹な行動をとる。

大人はどうして、複雑になっていくのだろう。

真意が計り知れない。

本当に別れたくて別れたのか、自分でもわからない。

自分でも複雑すぎて、自分の気持ちが把握できない。

愛した人のことまで、わからなくなってしまふ。

あいつは本当のところ、どう思っているのだろうか。

チャイルドシートに乗っても泣きじゃくっていた洋人は、しばらくして疲れて眠ってしまった。

泣き声は車内の童謡をかき消すほどだったが、オレはそれに黙って耐えた。

耐えることが、息子に対する一つの償いだと思った。

洋人にはこれからも、責めただけ自分を責めさせてやるつもりだと思っ
ている。

子供には微塵の責任もないわけだから。

その寝顔を見る。

幸せそうに眠っている。

陽気な童謡が車内に静かに流れている。

待ち合わせ場所に着いたときには、日中厳しかった日差しが和らい
でいた。

ハンドルをきつく握り、オレはリエの到着を待つ。

いつも洋人が疲れて寝ている間にお別れをするようにしている。

受け渡しの際にもし起きてしまったら、自分には耐えられる自信が
なかった。

「待った？」

横付けされた白いファミリーカーから降りると、リエはこちらに笑顔を向けてくる。

オレは黙って首を振る。

大丈夫だった？

迷惑かけなかった？

リエはその他いくつか質問をしてきたが、オレは黙って相槌を打つだけだった。

「でーしゆって言うてるでしょ？」

「可愛くない？」

「最近、少しずつ会話ができるようになってきているの」

今日の洋人との会話を思い出し、頷いて見せる。

声を発しないオレにリエは悲しそうな視線を向け、後部座席に回りこむ。

どうして悲しそうな顔をするのか。

どうして仲のよかった頃の話し方をする。

どうして、何かを求めるようにオレのことを見るのか。

そんな時、オレはリエの嫌いなところを思い浮かべる。

別れた理由を必死に探し求める。

しかし明確な答えが見出せないまま、楽しかった思い出だけが鮮やかに蘇ってしまう。

「なんだ、チャイルドシート、固定されてないじゃないか」

オレはそう言って後部座席に寄せられただけのシートをしっかりと固定し直す。

「こういうとき、やっぱり男手があると便利よね」

感心したようにリエは言う。

そしてまた、何かを求めるような視線を向けてくる。

が、オレはそれに気づかないフリをする。

「もつとしっかりしてくれよ」

傾いた日差しに染められたアスファルトを見ながらそう呟く。

動物園で散々走りまわったからだろう、ぐっすりと寝入った洋人はチャイルドシートから抱きかかえられても目を覚まさなかった。

母親に全体重を任せて安らかに眠っている。

オレは洋人がリエの車のチャイルドシートに寄せられるまでの一連

の動作を一步下がってみているだけだった。

リエは慣れた手つきでシートベルトを固定した。

購入当初はコツが掴めず、なかなか固定させられなかったのに。

オレのいないところで何度も洋人をシートに乗せ、次第にコツを掴んでいったに違いない。

オレはリエの背中を見つめながら、自分のいないリエと洋人の時間を思った。

その時間は刻々と増えていく。

三人でいるはずだった時間。

取り戻せない時間。

「じゃあ、また来週ね」

逆光で眩しげにリエはこちらを見る。

オレは黙って頷き、眠っている洋人の頭をやさしく撫でる。

エンジンが掛けられ、お別れの時がやってくる。

オレは自分のタイミングで後部座席のドアを閉めなければならない。

このドアを閉めたら、洋人に会うのは一週間後になる。

一週間後にはまた会えるではないか。

そう言い聞かせて、ドアに手を掛けた。

その時、近くに停めていた車の防犯ベルがけたたましく鳴り出した。

オレは音の出所を無意識に探したが、それはすぐに鳴り止んだ。

「
パパ？」

振り向くと、洋人がオレを見上げていた。

「
パパ？」

息子は身を擦ってシートから抜け出そうとするが、動けない。

「
ヒロ、また来週な」

そういうと、洋人の顔は見る間に紅潮し、皺くちやになった。

「
イヤでーしゅ」

「
大丈夫。また会えるんだから」

「
パパ、いかないでーしゅ」

「
少しの間、我慢してくれ」

泣き喚く我が子を見つめながら、オレは車のドアを閉める。

「パパ、いかないでーしゅ！」

しかしドア越しにでもその叫びは聞こえてきた。

「パパ・・・」

車は滑るように動き出し、角を曲がって見えなくなった。

しばらくオレは突っ立って、車のリアガラスの残像やら洋人の叫びの残響やらを探した。

走り出したい衝動、叫び散らしたい衝動、泣き出したい衝動。

その全てを堪えて、夕焼けに映し出された影に目を落としていた。

(後書き)

安易な離婚(結婚)は誰にも何もプラスにならない(という自分への戒めの作品)

一言でもご感想いただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家なるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1748o/>

パパ、いかないでーしゅ

2010年10月9日12時58分発行